

芥川龍之介「日本の女」に見る ラザフォード・オールコック『大君の都』¹

濱島広大

はじめに

芥川龍之介(1892-1927)とえば、『鼻』、『地獄変』、『羅生門』などの小説の作家として知られる人物であるが、東京大学で英文学を学んだことから英文学に対する造詣が深いだけでなく、随筆の執筆や雑誌編集など多彩な才能を持つ人物でもあった。そのような英文学に関する教養に基づいて書かれた作品の中に「日本の女」(『婦人画報』第234号及び第235号所収)²という随筆がある。この随筆は雑誌『婦人画報』の1925年4月1日及び5月1日発行の号に掲載されたものであるが、この中でチャールズ・マック・ファーレーンの『ジャパン』³とラザフォード・オールコックの『大君の都』⁴を引用し、特に後者を重視して日本の女性について論じ、婦人運動を女性自身の手で行うことの重要性に言及している。芥川がオールコックを重視する理由は、オールコックの記述が正確さであり、ジョン・スチュアート・ミルの哲学に基づくオールコックの分析が信頼できるからであるという2点を挙げている。そのような態度から考えると、この随筆の着想は『大君の都』によって想起されているように見えるが、「日本の女」の結論である、「婦人運動が婦人自身の手を俟つほかに、成功する見込みがない所以である」⁵という部分は、芥川が揚子江を遡る船内で合ったノルウェー人との会話から帰結しているものであり、オールコックの記述を女性の扱いの不当性の事例の言及のために利用しているように見える。また、この「日本の女」が書かれた時期を考えれば1859年からの約3年間しか扱っていない『大君の都』の内容は60年以上前の女性像で古いという非難を受ける可能性もあるが、芥川はあえて『大君の都』利用していると言える。そこで、本論文では、オールコックやマック・ファーレーンの著作を芥川がどのように利用し、「日本の女」を著した要因を分析する。そのような分析を通して、「日本の女」に利用された『大君の都』の作品としての価値を検討する。

1. 芥川と女性

芥川と「日本の女」

「日本の女」は先にも触れたように、1925年に発表されたものであるが、このとき芥川は33歳であった。この時期は、芥川の心身衰弱がひどかった時期の1つ⁶と言われており、同年に『中央公論』で発表した自伝的小説である『大導寺信輔の半生』ではそのような自身の状態が反映されてか、暗い雰囲気作品となっている。

「日本の女」についての評価は不十分な女性論と考えるものもあれば、芥川の女性観を知る好資料と考える立場のものあり、論者によって多様である⁷。

「日本の女」は先にも述べたように、チャールズ・マック・ファーレーンの『ジャパン』とラザフォード・オールコックの『大君の都』の2つの作品を多く引用しながら、芥川自身の体験談を重ねて論じたエッセイである。簡単に内容をまとめる。芥川は、日本人女性の社会的地位に関して、マック・ファーレーンの記述は誤りで、オールコックの記述は正しいと論じる。その上で、芥川は、オールコックが滞在した1860年前後から60年以上経つにも関わらず、女性の地位は大きく変化していないため、改善される必要があると考える。しかし、男性は女性の社会的地位を正確に理解できないことが多いので、芥川は、女性の地位を改善するためには女性の地位を正確に理解している女性が運動を主導する必要があると結論付ける。

具体的に表現を見ていく。芥川の分析によればチャールズ・マック・ファーレーンの伝えた女性は、「殆どユートピアの女」⁸であるとし、その記述の不正確さをアイロニカルに批判している。その一方で、ラザフォード・オールコックについては、「日本の女に對する正當に近い見解を得ることの出来たのは、少くとも後代の讀書子には幸福であるといはなければならぬ」⁹と言っているように、記述の正確さを肯定している。また、オールコックが「日本の女を輕蔑」¹⁰しているとも芥川は分析している。そのようなオールコックの日本の女性へのネガティブな評価こそ、日本女性の地位の低さに起因していることも芥川は示している。そしてそのような地位の低さを認知することが男性は可能かということについては芥川自身の中国での体験談を根拠に利用している。その体験談では中国人や日本人の女性の社会的地位の低さを批判しているノルウェー人男性でさえ、滞在したときに夫を持つ中国人や日本人の女性から厚遇を受けたためか、そのような女性を理想的な存在として褒めており、女性の社会的地位の低さが分かっていたとしても実際の行動には反映できていないことが示されている¹¹。そして、女性運動において女性自身が行う必要なければ成果はでないと帰結している。芥川はアイロニーや婉曲といった文章表現を好んでいたように見えるため¹²、「家畜」や「輕蔑」など語気の強い表現に注目して、

強い皮肉あるいは婉曲と取れば、男性優位を含意していると捉えることもできる。だが、『婦人画報』に掲載された「日本の女」以外の作品にも見えるが、芥川は批判を行なったとしても、必ず女性に対する配慮を示している¹³。つまり、ただ批判をしたいのではないことがわかり、芥川は男性優位を含意しようとしていない。それにもかかわらず、芥川が男性優位に見えるのは女性運動という特殊な背景における言葉選びに彼が慣れていないということが挙げられる。そこで、次に芥川が女性をどのように捉えていたかを述べ、「日本の女」における芥川の女性に対する姿勢を明らかにする。

捉えがたい芥川の女性観

芥川と女性について考えるに当たり、彼の経歴は見逃せないものがある。彼が誕生した時に両親が厄年であったことから、芥川は旧来の風習に従って形式的に捨て子にされている。また生後間もなく母親が精神異常をきたし母親の兄の家に預けられ、さらに芥川が10歳のときには母親を失っている。そのため、実母から愛情を多く受け取ることができなかったという問題があった¹⁴。また同時に失恋の経験をしているという点も見逃せない¹⁵。女性に対する嫌悪とまではいかないまでも比較的ネガティブに捉えられるような状況に反して、芥川はラブレターの名手とされるほど純粋に恥ずかしげもなく女性に気持ちを吐露する姿も見られるなど単純に女性嫌いとして捉えることは難しい一面もある¹⁶。そもそも女性嫌いなのであれば結婚することもなかったであろう。このように、芥川の女性観を単純に説明することは難しいのである。しかし、今回は妻としての女性が問題となるので、芥川の女性観を分析するために、芥川の女性についての議論を整理したうえで、芥川の恋愛観や結婚観について分析を行なう。

まず、芥川の女性についての議論を見て行く。「女？」(『女性』第7巻第5号1925年所収)¹⁷と題した対談を取り上げる。この対談において、芥川は女性に関する貞操観念・結婚・ファッションなどに加え、恋愛観や自身の好みの女性についても言及している¹⁸。例えば、芥川の知人でもあり対談の参加者であった里見と女中のエピソードを交えて恋愛観や貞操観念について議論をしている。その中で、「新しいお嬢さん」の出現から10年経ち「新しい年増」の出現が見られ新時代の到来を感じた芥川は、女性は夫以外の男性と適切な交遊関係を持ちたがるという傾向と、異性趣味の変化(欧米人の男性とも付き合うようになったという変化)と、自由恋愛によるあとくさりのない交際を望む傾向の3つを挙げている。新時代の女性の傾向の議論から発展した、恋愛の根底についての議論において、「男が女を嫌ひだと云ふことになると人類が亡びるね。して見ると女嫌ひは危険思想だね」¹⁹と発言している。そ

ここでは同時に同性愛にも触れており、恋愛を考える上で異性愛と同性愛は芥川の中で切り離せなかったようである²⁰。また対談の最後に、自由恋愛でも相手の女性を選べる範囲は非常に限定的として怪訝さを表す。なお、この座談会の中で巧みさを感じる芥川の発言として「男女はもと背中と背中をくっつけた一つのものだつたのを背中から二つに切り離したのだ。その半身と一つにならうとするのが戀愛なんだ」というものがある²¹。これはプラトンの『饗宴』を感じさせるものであるが、この対談がプラトン社が発行する『女性』という雑誌の対談記事になる予定であったことを考えると、ユーモアに富んだ発言であろう。このような姿勢を見ると、対談の司会者や発起人ではないので自由に発言することも許される状況においても芥川の一定の配慮や心遣いが見られる²²。

「女？」と同じ対談である「女性改造談話会」（『女性改造』第2巻第8号1923年所収）²³でもそのような姿勢が見られる²⁴。なお、この「女性改造談話会」は、唐戸が指摘するように「総体として散漫な印象は否めず、実りの少ない座談会ではある」ものではあるが²⁵、芥川の姿勢や考えの一端を読み取ることができる。例えば、現代の女性は男性に何を一番要求するのかについて話した部分において、対談参加者の佐藤がよき女性はよき男性を求め、悪しき男性は悪しき女性を求めるというような人間性が同程度である者同士が惹かれ合うという発言に対し、芥川は「よき男性が悪しき女性を要求する場合がある」²⁶と例外的な事例を提言する。さらに芥川はビスマルクの10人目の妻であることと、ドイツ国境の番人の妻になるのであればビスマルクの妻の方を望むとしている²⁷。後に触れる恋愛観に関するものであるが、恋愛は単純なものではないという考えが根底にある。これは失恋事件との関連が考えられる。つまり芥川自身は好きだった吉田弥生と結婚できなかったという経験がある。吉田弥生との結婚は、一夫多妻や一妻多夫が認められれば成就したという考えがあった可能性があり、そこから恋愛の複雑さを理解していたのであろう。またそのような多妻や多夫に関して女性は、妊娠があるため多夫を選択すれば自然に反すと言った意見が出る中、芥川は「子供を他に育ててくれるものがあつたら女も男と同じ感じになるでせう」²⁸と発言しており、意識していたかは別として、他の参加者の発言は生物学的性ではなく文化的性に基づいた発言であることを指摘しており、芥川の女性観の先進性がうかがえる。

このように、芥川は女性についての考えを持つ際に、「女性改造談話会」で示された一夫多妻や一妻多夫の考えからわかるように自身の経歴の影響が大きい。しかし、「女？」や「女性改造談話会」の2つに共通して見える思考としては、異性愛と同性愛や自由恋愛の問題など多様な恋愛観をもって、女性について考えている。また、女性の風俗・習慣・流行など当時のなものへの関心も強かったことが見えるが、恋

愛と切り離して女性について論じていても最終的には恋愛観が何らかの形で提示される。芥川の女性観を正確に理解するために、次に恋愛観・結婚観について検討する。

芥川の恋愛観と結婚観

まず、「或恋愛小説—或は『恋愛は至上なり』」（『婦人グラフ』第1巻第1号1924年所収）²⁹について見る。内容については触れないが、この小説の最大の特徴は、現実とは異なり小説において恋愛は必ず成就するものであるという固定概念の否定で、小説においても失恋を念頭に置く必要があると主張している点である。これもやはり失恋事件の表われとして見なすことができ、副題にある「或いは『恋愛は至上なり』」という部分は相手を思っているときに最上であるという悲観主義な恋愛観を呈している。

そのような小説世界と現実世界は異なるものであるという考えは「私の好きなロマンス中の女性」（『婦人画報』第170号1920年所収）³⁰でも見られる。「一、ロマンス中の女性は善悪共皆好み候」と「二、あゝ云ふ女性は到底この世の中にゐないからに候」というたった2つの文から構成されているが、ここでも小説世界は理想的ではあるが現実にはないとしている。

だが一方で恋愛において現実主義を通していかといえ、³¹「侏儒の言葉(遺稿)」(『侏儒の言葉』所収)の「恋愛」という項目において、「恋愛は唯性慾の詩的表現を受けたものである。少くとも詩的表現を受けない性慾は恋愛と呼ぶに値ひしない」と述べており、「詩的表現」と曖昧ではあるが、完全には現実主義の立場をとっていないことがわかる。

そのような現実主義と理想主義の合間において芥川は「恋愛及結婚に就いて若き人々へ」（『婦人倶楽部』第2号1920年所収）³²において次のように「この人でなくてはと思ふ人のみを愛し或は夫とする事。決して中途半端な恋愛や結婚をせぬ事。さもなくば自己も他人をも不幸にすべし。こは道德にあらず。單に事實なり」と述べている。ここでもやはり「思う」ことを重視しており、先の「詩的表現」はそのような純粋に相手を思うことに近似するものと言える。だが、理想主義と現実主義においてどちらが強調されるかは当時のという側面がある。例えば「僕の好きな女」（『婦人倶楽部』創刊号1920年所収）³³において相手への気持ちが強いと大して見た目が良くない女性も絶世の美女に見えてしまうと述べており、現実主義を肯定している。これは山田が、「僕の好きな女」を書いた「当時の芥川はまだ「愁人」問題の渦中にいた。この現実から、ここで描かれる理想の女性像との落差を読みとることができるであろう」と指摘しているように、ここでも当時のな影響が見られる³⁴。

なお、この「僕の好きな女」の中ではスタンダールの『恋愛論』を参考にして、1人の女性を一途に思うウェルテル型と、複数の女性に対して思いを馳せるドンジュアン型の2つの恋愛観を挙げ、自身を中間的としている。そして、自身は消化器、とりわけ胃の状態も恋愛に影響すると述べ、恋愛については「下根の凡夫」であると低い評価を与える。

このように、恋愛に関して芥川は「思う」ことを重視している。この「思う」についても詩的なものを伴っていなければならない「思う」であり、「思い」の純粹さというものが重要になると見える。実際、理想的に近いほど純粹に「思う」必要があるという意図を持って書かれたのか、「結婚難並びに恋愛難」（『婦人の國』第1巻第3号1925年所収）³⁵は非の打ちどころのない絶世の美女の王女であるゼライイドは自由恋愛が特別に許されて自身で恋人を選んだが、その男性は顔が醜い奴隷の老人であったという話であるが、ここでも自由恋愛における「思い」の重要性を挙げている。特に「結婚難並びに恋愛難」は芥川が身分不相応などを理由に吉田弥生と結婚することができなかった経験を反映しているように見え、「恋愛及結婚に就いて若き人々へ」では妻がいながら秀しげ子と不適切な関係を持ち思い悩まされ続けた心理を反映しており、その点で一途な姿勢をせせなかったことを悩み続けたことを反映し「僕の好きな女」において自身はウェルテル型とドンジュアン型の中間型としている。恋愛観には芥川の後悔の念が感じられる。

芥川と女性

芥川の思考を捉える際に、吉田弥生と結婚できなかったことや、秀しげ子と不適切な関係を持ったことなど芥川自身の経験は大きく彼の思考に影響していることは明白であり、女性観にも反映されている。そして、女性観に影響を与えたような恋愛観は理想を持ちつつも、自身の経験の反映もあって現実的な姿勢も強い。言い換えれば芥川は理想的で現実的という矛盾する2つの要素を抱えた女性観・恋愛観を持っていたと言える。これは逆説的に、芥川自身が「好きな女性と結婚し、結婚後は妻を最期まで愛す」という理想を持ちつつも、それを全く成し遂げることができなかったという現実を意識せざるを得なかったということを示している。その結果、芥川は、現実と理想の両方の側面から女性について検討しているので、片方のみで語られる女性観に対して否定的である。「或恋愛小説—或は『恋愛は至上なり』」などの主題に見られるように、芥川は特に理想のみで語られる女性観を、認めていないようである。次章ではそのような女性観を参考に、「日本の女」を書く際に参考にした外国人による日本論について分析を行っていく。

2. マック・ファーレーンとオールコックに対する芥川の姿勢

『ジャパン』と「日本の女」—理想的な女性観に対する芥川の批判—

マック・ファーレーン『ジャパン』と「日本の女」の関係は既に確認したように、芥川が誤った女性観を展開している作品として取り上げている。では、そのような作品を具体的にどのように利用しているか、またその内容を見る中で『ジャパン』とはどのような作品として評価し、利用したかを見て行く。

「日本の女」は厳密に言えば上・下の 2 部に分かれている作品であり、『ジャパン』が利用されているのは上の方である³⁶。「日本の女(上)」は、第 1 段落において『ジャパン』の書誌情報や作品の全体的な内容について紹介する。1852 年の出版年以外は Preface において書かれている内容を要約している。例えば、一見作品とは関係ない、マック・ファーレーンの友人ドラモンドの妻について芥川は記述しているが、原文に‘Mrs. Drummond was a grand-niece of Smollett, and as fond of books and of quiet, unpretending literary society as was her husband’(『ジャパン』Preface xi)とあり、原文を丁寧に読んでいることがわかる。

第 2 段落ではそのような作品内容などを受けて「到底實際日本の地を踏んだ旅行家の紀行ほど正確ではない」(p.278)としている。さらに、作品中の挿し絵についても「朝鮮の風俗を日本の風俗として、すまして入れてみるくらゐである」(「日本の女」p.278)とし批判している。挿し絵については全て同じ画家のもつと見られるものが採用されている。また芥川は、「日本の皇帝は煙管を澤山もつてゐて、毎日違った煙管で煙草をのむなどといふことを眞面目に記載してゐるのは頗る御愛嬌といはなければならぬ」(「日本の女」p.278)と批判を行なっている。皇帝、すなわち天皇の喫煙については‘He was allowed for his solace one wife and twelve concubines, plenty of pipes for smoking, and such diversion as music, poetry, and study could afford him’(『ジャパン』p.152)という部分を参考にしているようだが、‘diversion’を誤訳している感があるが、丁寧な読解の姿勢が見える。

第 3 段落以降は基本的に、「この本の中に日本の女を紹介し且つ論じた一章がある。それを今ざつと紹介して見ようと思ふ」(「日本の女」p.278)という前置きに従って紹介を行なっているが、該当箇所全訳に近い形で紹介しており、芥川にとっての「ざつと」は解説をせずに全訳することのようだ。ただし、「日本の女を紹介し且つ論じた一章がある」という表現は少し不適切で、紹介する記述がある第 10 章(BOOK X)は‘POPULAR AMUSEMENTS — DOMESTIC MANNERS — GENERAL CHARACTER’と付されており、誤解を生む書き方である。「日本の女」の p.278 の「女が社會的にどういふ地位を占めてゐるかといふことは」から p.280

の「彼れ自身十文字に切つて往生するのである」までは、『ジャパン』の p.293 の‘As we have repeatedly stated, the condition of women の the condition of women’から、p.295 の‘by slashing himself across the abdomen with two slashes, in the form of a cross’までに該当している。特徴的な部分を取り上げて考察していく。

「金持ちや貴族の間では、男は概して、女ほど貞操を守らない」（『日本の女』p.279）という部分は‘Among the rich and great, the husband, in general, is very far from corresponding to the fidelity of the wife’（『ジャパン』 p.294）と書かれている部分を受けている。『ジャパン』において‘husband’と‘wife’が「男」と「女」に改められているが、これは芥川が夫と妻よりも男性と女性の対比の方が正確だと思っているからである。同段落の後で‘mothers and wives’と書かれていることを受けてこの‘wife’は「妻」だけではないということを表わしたいという意識が感じられ、ただ前から翻訳しているのではなく解釈していることが伺える。このような解釈を示す姿勢は他所でも良く見られ、例えば女性は不名誉を恥じるという事例として紹介されている物語において、女性のセリフにあたる「一切の事情を申し上げます」（『日本の女』p.280）という部分は‘his desire should be satisfied’（『ジャパン』 p.295）に相当する部分である。このセリフの前において妻の様子が不審で、その原因を夫が問いただしており、それに対して妻がなした返答の一部が先の文である。つまり、夫の望みは様子が不審である原因を知りたいことと解し先の訳をしており、丁寧な読解をしていることが伺えるだけでなく、小説家らしい物語の臨場感を高める工夫をなしている。実際、この部分は原文で間接話法で書かれているが、芥川は引用符を付して、直接話法の文へと改めている。ただそのような工夫の一方で誤訳、あるいは訳の工夫が効きすぎている部分もある。例えば、「屋根にある露臺」（『日本の女』p.280）は原文において‘the terraced roof’（『ジャパン』 p.295）と表現されている部分だが、辞書義では「平屋根」という意味である。また、「私はあなたの妻となる資格を失つたものでございます。どうか殺して下さいまし」（『日本の女』p.280）は‘she...passionately demanded that her husband should slay her as an unworthy object unfit to live’（『ジャパン』 p.295）の部分を受けているが、厳密には「生きる価値がない」という意味である。この妻にとって生きる意味とは妻であることと考えたことになり、意識が強い部分と言える。

しかし、原文についてただ適当に処理していないことがわかる。『ジャパン』から引用した物語の解説に入り、マック・ファーレーンはランドールの『追憶記』を参考にしてこの物語を論じていると芥川は示している。この言及は『ジャパン』の脚注を参考にしているものであるが³⁷、芥川は、同様の話を近世の物語の中で見つけることができなかったと自身で調査したことを示している。また物語の中にある、

露臺での宴会やキスをする場面は西洋人らしいアレンジが加えられた物語であると芥川は不正確さを指摘する。ただ一方で、芥川は、留保としてこのような他国の文化を伝える際に自国の文化が混淆してしまうことは誰にでも起こりうることでマック・ファーレーンのみを責めることはできないと言う。

そのような批評を行なった上で、『ジャパン』の中にあるもう 1 つの逸話について言及しており、「日本の女(上)」pp.281-282 は『ジャパン』p.296 にある逸話を全訳したものである³⁸。こちらについてはわかりやすくまとめている傾向がある。先の箇所と同様に注目すべき記述のみを取り上げる。

この逸話とは、いわゆる慶安事件のことである。初めに、丸橋忠彌の居住地が原文において‘who resided at Yeddo’³⁹と記載されているが、「日本の女」では省略されている。また、‘her husband’s papers which would have revealed the names of his confederates (among whom were men of distinction and princes of the land)’⁴⁰という部分は、前後を含めて「チュウヤの妻は、その間に、格闘の音を聞いて、早くも捕手の向つたことをさと、夫の重要書類を日の中に投げ込んだ。その書類には、陰謀の一味たる貴族などの名前も載つてゐたのである」(「日本の女」p.282)としており、臨場感がある。そのような臨場感という点は他所でも見られ、本文において‘An alarm of fire was raised at Tchouya’s door’⁴¹としか書かれていない箇所は、「捕手はチュウヤの門の前で『火事だ、火事だ』といふ聲をあげた」(「日本の女」p.281)と改められている。引用後は先と同じように、簡単な解説としてチュウヤが丸橋忠彌のことでありジオシツは由井正雪のことであることに触れた上で脚注にも言及している³⁹。芥川は、慶安事件の逸話における忠彌の妻は決断力が誰よりもあり、夫のためによく働いている事例として、『ジャパン』で利用されていると見なしている。そして最後にマック・ファーレーンの伝えた日本の女は、「殆どユートピアの女である」(「日本の女」p.282)として、不正確さを述べる。特に、処女性や貞操が、マック・ファーレーンが述べるほど維持されていたという点については信用できないと明確に誤りであることが示されている。これはマック・ファーレーンが取り上げた物語において、妻は強姦され、生きる資格がなくなったというのは過剰すぎるとするのが芥川の評価である。つまり、芥川は、マック・ファーレーンの日本人女性像は理想的な妻としての像が強く現実味がないと認識したのだろう。

『大君の都』と「日本の女」—正確な女性観に対する芥川の共感—

『大君の都』は、「日本の女(下)」の下敷きとなっている作品であり、しかも芥川が正しい女性観であると評価している作品である。『ジャパン』と同様に、分析を行なっていく⁴⁰。

まずは具体的な女性論に入る前に、原文との比較を通して、テキストの異動を確認する。「日本の女(下)」は『ジャパン』と『大君の都』の比較から始まり、『大君の都』が正確であることが述べられる。その後、書誌情報や簡単な内容紹介に移る。2巻本であり、1863年にハーバーから出ているものだと説明されている⁴¹。次に挿し絵について触れている。挿し絵には蕙斎の絵も含まれており、それらが正確な絵であることを言及している⁴²。その後、オールコックの記述が信用に足る2つの根拠を挙げている。1つ目はマック・ファーレーンとは異なり実際に日本に訪れている点、2つ目は学問があり、特にミルの哲学などにも通じている点を挙げる⁴³。その上で、オールコック独自の見解の中には面白いものも含むと留保もしている。その後、オールコックの簡単な紹介をしているが、これは原文を参考に記載している⁴⁴。そして内容に入る前に、見解の面白さについて触れており、お灸に関する話と、音楽と鶯に関する話を取り上げている⁴⁵。だが、厳密に言えばお灸の話では「ばあさんが子供に灸をすえてゐるのを見て、『われく人間は、古今を問はず、東西を問はず、架空の幸福を得るために、自ら肉體を苦しめることを好むものである』と嘆息してゐる」(「日本の女」p.284)と述べているが、原文ではI saw an infant held across its mother's knee while another woman, quite remorselessly, was burning two or three of these pleasant pastils about the umbilical region....'(第21章(I)p.391)とあり、「ばあさん」ではないし、しかもそれを「見て」としているが後半部分はI found that man's ingenuity in torturing himself for some fancied good or evil was not without its example among my friends here....'(第21章(I)p.390)の通り、友人の間にそのような習慣があったと言っており、厳密ではない。なお、鶯の方は原文通りとなっているので、前者については誤読していた可能性がある。その後、桜田門外の変と忠臣蔵についての分析を紹介して、具体的な内容に入っている⁴⁶。

具体的な内容として、『大君の都』から日本をはじめて見た印象に関する部分を一部「中略」を挟んで導入として引用している⁴⁷。「中略」よりも前に関しては6月4日についてオールコックはof pleasant memory of Etonians'とイートン校出身者にとってどのような日であるかを述べているが、本文にはこれからの議論に関係ないため、芥川は省略している。このように、芥川は議論に関係ないものは省略しており、「中略」部分では今までの出島でのオランダ人たちの生活を想像したり、中国や日本の外交について考えたりなど第1印象とは関係ないことが述べられている。その後の長崎の湾についての部分は再び第1印象に話が戻るため、再度引用している。しかし、この部分は原文が複雑であり、解釈がしづらいため、誤訳なのか省略なのか判別できないが次のような変更がなされている。1文目ではThe first aspect of the bay itself strongly recalls to the European traveler some of the more

picturesque fiords of Norway, especially the approach to Christiania, the capital' という部分について「湾そのものゝ、第一印象は、頗る、ノールウェーの峡湾に似てゐる。殊に、ノールウェーの首府クリスチアニアにはいるところに似てゐる。尤も峡湾は、長崎の湾により美しい」(「日本の女」p.285)としており、若干意訳が強いように見える。直訳するならば、「長崎湾自体の第一印象は、そのヨーロッパ人の旅行者に、強くノルウェーのより絵画的ないくつかの湾、とりわけ首府クリスチアニアへと接近するときのこと[接近するときに見える、オスロ・フィヨルドのこと]を思い出させる」(拙訳)の方がふさわしいといえ、芥川も苦勞して読んでいたことがわかる。そのようなどうしても解せなかった部分は省略しているらしく、'But the Swiss lakes also produce scenes much more resembling this than one could have anticipated' という部分は前後は訳されているにも関わらず省略されている。これは 'this' の指示対象が曖昧であるだけでなく、突然スイスの湖が出てくるためオールコックの独特な言い回しに慣れていないと解しづらいが、'also' があることからノルウェーの湾と形の点で、スイスの湖と植物の生育の状態の点で似ているということを伝えたいと感じられる。そのため、既に見た長崎の第1印象の記述に続く「植物はノールウェーよりも遥かに熱帯的である」という部分は正確ではなく、「スイスよりも」あるいは「ノルウェーやスイスよりも」と表現すべきである。なお、そのような細かさはオールコックが地理学に明かかったことがあり、芥川は「植物」と短くまとめているが、原文は'trees and shrubs'となっており、これは「高木と低木」というように木の植生を意識した表現しているので、地質と植生の2つの点から見ている可能性は高い。しかし、芥川は翻訳しているのではなく紹介をしているので細かな誤訳は気にすることはないが、このような複雑な文章にも関わらず、よく向き合っている姿勢が見える。また、わかりやすさを高めるために変更を加えるなどの工夫をしている一方で、慣れない文体ゆえに誤読も見られるということがわかる。このことから、オールコックの文は読みづらい文であることは理解しつつも重要な指摘があると感じ、出来る限りの範囲で引用を行ない、議論に活用していると言える。

そして本題の女性論に入るのだが、既に注で触れたようにこの女性論は第34章から引用している⁴⁸。この章を引用した要因としては、'Husband and Wife.—The Relation of the Sexes.—The position of Woman in the social Scale' という副題がついているからだろう。しかし、この章は政治論、芸術論、宗教論も取り扱っており、興味深い章と言え、芥川も関心が惹かれたのであろう。

ここでも今までと同様に注目すべき箇所のみ言及していくが、比較的短い表現に注目すると、'as a nation'を「国民として」、'its sanction and intervention'を「認

可」、「as household drudges or slaves」を「家畜或は奴隷のやうに」のように訳しているが、本来は「国として」、「認可と仲介」、「家事をこつこつ行う人あるいは奴隷のやうに」となるべき個所であろう。1つ目と2つ目は見間違いか、意識の類と解することができるし、文脈はおかしなものにはなっていない。しかし、3つ目はそのような見間違いの類と見なすこともできるが、この部分を使って最後の結論に用いており、他の誤りに比べても意味も大きく異なるので、単純に誤りとすることはできない。ここから1つの可能性として‘slave’と並置されるもので、前後の文脈からあり得るものと考えた結果として「家畜」と訳していると考えられる。そのような視点で見直すと、‘though neither serfs nor domestic slaves could be bought and sold like chattels or cattle’という部分を「農奴や奴隷や家畜のやうに賣買されることはない」(「日本の女」p.286)と解釈しており、芥川は‘slave’と‘chattel’あるいは‘cattle’が並列しているものと考えているため、先の部分のような誤訳が生じたと言える。誤訳が生じてしまうのは既に述べているように英文自体が難解で誤解しやすいということがある。なお原文と比較したときに4つの文が省略されているが、いずれも原文において補足的に付されているか、同一内容の繰り返しの箇所であるから省略されていると考えられる。しかし、すでに見た‘I would also say, that even though a people may be free from the institution of slavery, though neither serfs nor domestic slaves could be bought and sold like chattels or cattle, and transferred from one master to another with the same facility’と、‘Certainly their position seems from many indications to be more tolerable, if not independent and respected than some of the premises would lend us to expect’についてはどちらも要約して掻い摘んで紹介している。前者については「なるほど、日本には奴隷制度はない。農奴や奴隷や家畜のやうに賣買されることはない」(「日本の女」p.286)としている。特に最後の‘transferred’以下がごとく並列しているかが分かりにくいので、そのような部分を誤訳しないように説明しなかったと言える。また、後者については「実際また、女のミカドといふものは、古今に少くはないのである」(「日本の女」p.287)としているが、これは前半の‘their’の指示対象がわかりにくいため、「ミカド」を補ったが、‘if’以下の内容は補ってもわかりづらいままであったので、省略されていると見える。

このように、オールコックの日本人の女性観は、女性が人身売買の対象とされ、奴隷のやうに扱われているという分析から、女性の社会的な地位は低く、冷遇されているというものである。そして、このようなオールコックの女性観に対して芥川は正確であると共感している。

『ジャパン』と『大君の都』に対する芥川の姿勢

マック・ファーレーンの『ジャパン』とオールコック『大君の都』に対する芥川の基本姿勢として、わかりやすくその本文の内容を伝えようとしつつも、原文に丁寧に向き合う姿勢が見られた。しかしながら、『大君の都』において芥川は誤訳をしていたり、要約して全訳をしてなかったりと『ジャパン』の紹介ではほとんど見られない紹介の方法をとっている。そのような紹介の仕方の要因はオールコックの英文が難解で扱いづかったという点が挙げられる。しかし、そのような扱いづらい英文にもかかわらず、芥川が『大君の都』を利用した理由は、オールコックが記述した 1860 年代の女性像が芥川の持つ江戸時代の女性像と近似していたからと言える。実際、芥川は近世文学に詳しくかったので、そこから江戸時代の女性像を持っていたと推測される。文体の近似性の証明は難しいものではあるが、今回の随筆において芥川は『大君の都』に対してはオールコックの「見解の中には、今日はわれくを微笑せしめるものもあるけれども、傾聴すべきものもないわけではない。これがまた、マック・ファーレーンの本などには、全然見られぬ特色である」(p.283)と批判しただけでなく、肯定的な評価を、皮肉を交えずに加えている。それに対し、誤った女性像を示す『ジャパン』については酷評した後理解を示すのだが、「今日でも多少かういふ喜劇の行はれやすいのは事実である」(p.282)と皮肉を含んだ理解を示している。このような皮肉を含んだ理解という点で言えば、オールコックも、母国と日本人を比較して程度の差にすぎないが、日本人の方がうその巧妙さにおいて優れているといった内容を述べており⁴⁹、自国と相手国を比較して皮肉を含んだ理解をした上で、批判を行なうという姿勢が似ており、そのような文体的な近似性も一層、芥川の心をつかんだのかもしれない。

3. 結論

芥川の婦人運動に対する態度は、オールコックが日本に滞在していた 1860 年代から 60 年以上経っても何も変化していない女性の冷遇された状態に対する批判から生まれており、男性の中では比較的先進的なものを持っていた。なお、その態度は具体的な策を提示することよりも前提となる運動の姿勢の提示に留まっている点は注意すべきである。しかし、そのような女性への冷遇についての評価は芥川の個人的なものではない。ほぼ同時代においてアメリカ人女性のアリス・メイベル・ベーコンが書いた『日本の少女と女性』は、津田梅子の協力を得て書いた海外の女性による日本の女性論であるが、中でも‘slave’という言葉が用いられており、芥川の評価が女性について不当に低いわけではない⁵⁰。そのような客観的な評価を持

ち、そこから自身の中国での経験を加味することで、現実的な婦人運動の手法として女性が主導していくべきであると提示している。これは男性が妻としての女性を理想化してしまい、女性の社会的地位の低さを見誤ってしまうことによって生じると芥川は考えている。しかし、このような理想化の原因となるのは恋愛観や結婚観であるが、芥川の恋愛観は見てきたように現実的側面を多分に含んでいるため、男性側の理想化された女性像には悲観的である。そして、婦人運動が婦人の手によってなされる重要性を提示していることは、女性たちが運動することを支援している格好となっている。そのような態度を、『婦人画報』というとりわけエリートクラスの女性を対象とした雑誌において示すことは明確に雑誌の特徴と読者を理解していると言える。つまり、婦人運動は女性主導で行なうべきであるという内容の随筆を読んで、実際に婦人運動を主導することが可能な層が読者であることも自覚していたと見ることができる⁵¹。そのように考えると、「日本の女」は芥川の婦人運動への態度と、1860年代から変わらずに冷遇され続けているという女性観が結実し、さらに外国人の視点を交えることで、正確さを増し、内容にふさわしい読者層を有する『婦人画報』に投稿したことは大きな意味があると言える。芥川の傑出した考えを可能にしたオールコックの『大君の都』の記述の重要性を伺わせる。言い換えれば、オールコックの描き出した女性像の描写は、外国人が描き出した像として、その正確さが信用でき、1860年代の女性像を理解するのに最適な文献の1つと言えるであろう。さらに芥川の言に従えば、大正時代までの女性像を理解するための参考になる重要な文献と言える。

註

¹ 本論文は、山梨県立文学館に収蔵されている芥川龍之介旧蔵洋書に含まれる、Sir Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: a Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, Vol. I, New York: Harper & Brothers, 1863. Print を参考に作成した。調査日(2015年9月21日)には閲覧できなかったが、現在(2015年11月26日)は Vol. II も画像で閲覧可能となっている。調査協力だけでなく、本来はそのような画像閲覧もできなかった Vol. II を今回の調査に際して、閲覧可能な状態にまでしてくださった山梨県立文学館学芸課の皆様、特に直接対応をしてくださった学芸課高室有子様にはこの場を借りて謝辞を申し上げたい。

² 本文は芥川龍之介「日本の女」『芥川龍之介全集 第七巻』岩波書店、1978年を参考にした。他の作品についても同全集を参考にしているので、以降は『全集第七巻』のように巻数のみを表記し、引用部については引用直後にページ数を示す。

³ 『ジャパン』の原題は Mac Farlane, Charles. *Japan: an Account, Geographical*

and Historical, from the Earliest Period at which the Islands Composing this Empire were Known to Europeans, down to the Present Time, and the Expedition Fitted out in the United States, etc. New York: George P. Putnam & Co., 1852. *Google Book Search*. Web. 11 Aug. 2015 である。なお以降『ジャパン』と示す。

⁴ 芥川自身はサー・ルーサーフォード・オールコック『日本における三年間』と記載している。なお、原題は、Alcock, Rutherford. *The Capital of the Tycoon: a Narrative of a Three Years' Residence in Japan*. 2 vols. New York: Harper & Brothers, 1863. Print である。なお、以降『大君の都』と示す。

⁵ 「日本の女」『全集第七巻』p.288。以降、同作品からの引用は「日本の女」とページ数で示す。

⁶ 山敷和男『芥川龍之介の芸術論』現代思潮新社、2000 年、p.15。ただし神経衰弱気質は学生時代からあると同書の p.14 で記載されており、また p.20 などには遺伝的なものとして病的性格があることが指摘されていることから、この時期が最も衰弱がひどかったとは言えないが中国派遣後の神経衰弱の時期として捉えるべきであろう。

⁷ 不十分な女性論であると捉えているものには、稲田智恵子「日本の女」『芥川龍之介全作品事典』、2000 年、p.411 がある。中立的に芥川の女性論の参考になると言う立場であるものには、田村修一「日本の女」『芥川龍之介大事典』2002 年、p.622 がある。また芥川の女性観について肯定的に捉えているものには、鎌倉芳信「芥川と新時代の女性」『芥川龍之介新辞典』2003 年、p.518 がある。なお以降、それぞれの辞書類について『芥川龍之介全作品事典』からの引用は『全作品事典』と表記し、『芥川龍之介大事典』からの引用は『大事典』と表記し、『芥川龍之介新辞典』からの引用は『新辞典』と表記する。

⁸ 「日本の女」p.282。

⁹ 「日本の女」p.288。

¹⁰ 「日本の女」p.288。ただし、ここで言う「軽蔑」は単純に軽蔑しているのではない。前提として、女性が人身売買の対象とされ、さらには家庭においても冷遇されている状況を受けていることから、オールコックがそこまでの状況にあるのになぜ女性は抵抗しないのかという疑問を抱いていると芥川は感じ、そのことを一言で「軽蔑している」と表現しているが、誤解を招く表現ではある。

¹¹ 「日本の女」p.288。

¹² 中野記偉「イギリス文学」『新辞典』pp.29-30 にそのような指摘がある。厳密にはジョナサン・スウィフトの影響で風刺や帰謬法を好んだという指摘であるが風刺

を婉曲や皮肉の1つと捉えることもできよう。

¹³「日本の女」が掲載された1925年発行の『婦人画報』に掲載された作品には、「日本の女」以外に、「壯烈の犠牲」(1月号、第231号)と「正直に書くことの困難」(2月号、第232号)がある。それぞれ本文は「壯烈の犠牲」『全集第七巻』と「正直に書くことの困難」『全集第七巻』を参考にした。

¹⁴ 関口安義「年譜」『新辞典』pp.681-685、および篠崎美生子「ジェンダー」『新辞典』pp.247-248。

¹⁵ 関口安義「年譜」『新辞典』pp.681-685 および栗栖真人「失恋事件」『新辞典』pp.259-260。なお栗栖真人「失恋事件」『新辞典』pp.259-260では失恋と作品の影響、具体的には「実体験による観念の肉化であった」と言及されているが、失恋の経験は作品だけでなく女性観にも観念の肉化があったのではないか。

¹⁶ 関口安義「年譜」『新辞典』pp.681-685、関口安義「ラブ・レター」『新辞典』p.50を参考にした。

¹⁷ 「女?」『全集第十二巻』pp.632-637。

¹⁸ 田司雄「女?」『大辞典』pp.400-401にも同様の指摘がある。

¹⁹ 『全集第十二巻』p.636。

²⁰ このような思考の背景の1つにオスカー・ワイルドの存在があるかもしれない。志保田務、山田忠彦、赤瀬雅子編著『芥川龍之介の読書遍歴 壮烈な読書のクロノロジー』学芸図書株式会社、2003年、p.331によれば明治45年～昭和2年の間に10の作品を読んでいる。ワイルドの作品への関心からワイルド自身への関心も感じられ、そこから恋愛における同性愛と異性愛の2つが思い浮かぶ素地ができたのかもしれない。

²¹ 『全集第十二巻』pp.636-637。

²² 志保田務、山田忠彦、赤瀬雅子編著『芥川龍之介の読書遍歴 壮烈な読書のクロノロジー』学芸図書株式会社、2003年、p.166によれば大正13年6月1日にプラトンの何らかの作品を読んでおり、この座談会の場で利用することは難しくない。

²³ 「女性改造談話会」『全集第十二巻』pp.554-559。

²⁴ 唐戸民雄「女性改造談話会」『大事典』p.512に「芥川は司会者の意図を汲み、まず「信仰」の意味を明確にしようとするが、他の参加者は基本概念の確認すらせず、自分の思いに終始した発言を繰り返す」とあるように芥川の場面にあった配慮が見られる。

²⁵ 唐戸民雄「女性改造談話会」『大事典』p.512。

²⁶ 『全集第十二巻』p.558。

²⁷ なお、男性については小野小町を具体例として表現している。

28 『全集第十二巻』 p.558。

29 「或戀愛小説一或は「戀愛は至上なり」『全集第七巻』 pp.3-11。

30 「私のロマンス中の女性」『全集第十二巻』 p.681。

31 「侏儒の言葉(遺構)」『全集第九巻』 p.346。

32 「戀愛及び結婚に就いて若き人々へ」『全集第四巻』 p.303。

33 「僕の好きな女」『全集第四巻』 pp.290-293。

34 山田篤朗「僕の好きな女」『大事典』 p.697。「愁人」とは秀しげ子のことである。

中田睦美「秀しげ子」『新辞典』 p.506 にも芥川の労苦と後悔について指摘がある。

35 「結婚難及び戀愛難」『全集第七巻』 pp.349-352。

36 『ジャパン』からの引用と「日本の女」の引用の区別がつくように、引用個所も他章とは異なりここでは引用直後に本文に『ジャパン』からの引用は『ジャパン』とページ数、「日本の女」からの引用は「日本の女」とページ数で示す。

37 なお、この脚注のランドールの『追憶記』(原題: Rundall, Thomas. *Memorials of the Empire of Japan: in the XVI and XVII Centuries*. London: Hakluyt Society, 1850. *Google Book Search*. Web. 14 Aug. 2015)の p.114 に全く同じ物語がありマック・ファーレーンが引用してきた箇所だとわかるがランドールは具体的にどこで知った話かは書いていないので、それ以上は元を辿れない。

38 『ジャパン』においてすべて同一ページにあるので、以降はページ数を付さない。

39 「ジオシツ」に該当する単語は Ziositz である。なお脚注の説明は先と同じランドールの『追憶記』からの引用であることが記載されているが、マック・ファーレーンの脚注自体が不正確でランドールの『追憶記』には慶安事件の内容はない。

40 『ジャパン』の分析と同様に、『大君の都』からの引用は章とページ数、vol. I と II の別がつくように示し、「日本の女」からの引用は「日本の女」とページ数で示す。なお、『大君の都』(I)は第1章～第22章、(II)は第23章～第34章が該当する。

41 飯野正仁「山梨県立文学館所蔵「芥川龍之介旧蔵洋書」目録」山梨県立文学館編『資料と研究 第五輯』山梨県立文学館、2000年によれば、芥川の持っていたハーバーから出ている通称ニューヨーク版は、vol. 1 が 1863 年で vol. 2 が 1868 年に出版されているので正確な年号としては誤りである。vol. 1 の年号と同じだと思い、vol. 1 と vol. 2 で年号が異なっていたことに気づけなかったであろう。なお、飯野でも指摘されているが実際に文献調査をして書き込みを多く行っていることがわかった。特に多いのは下線部であるので重要だと思った個所に注目して読んでいたようである。

42 『大君の都』には複数の作者による挿し絵があるが、ワーグマン以外のものは作者が明白に示されていない。しかし、蕙斎の作品(『黄表紙』の挿絵や『江戸職人づ

くし』など)と思われるものがあり、芥川も同様の感想を抱いたのであろう。なおオールコックは絵の一部のみを利用しているので、明確にどの作品から引用したかはわからない。

⁴³ この記述の要因としては芥川が『大君の都』(Ⅱ)の中で最も参照している第 34 章においてオールコック自身がジョン・スチュアート・ミルの考えと一致していると p.220 において述べていることから 1 つの例示として挙げているのであろう。また、当時の日本においてミルは良く知られた人物であり、オールコックの知識人らしさを強調できたと言える。なお、*The subjection of Women* については金子幸子「明治期における西欧女性解放論の受容過程—ジョン・スチュアート・ミル *The subjection of Women* (女性の隷従)を中心に —」『国際基督教大学学報ⅡB「社会科学ジャーナル」』(国際基督教大学) 第 23 号(1)(1984 年)、pp.73-92 や、*On Liberty* について王晓範「ミルの *On Liberty* は明治日本と清末中国でどのように読まれたか—中村正直訳『自由之理』と嚴復訳『羣己權界論』—」川本皓嗣、松村昌家編『大手前大学比較文化研究叢書 3 ヴィクトリア朝英国と東アジア』思文閣出版、2006 年などがある。ミルの思想が明治期の時点で流入しており多くの知識人の知るところになっていた。なお哲学と言っているがこれは「考え方」の意に近いものである。

⁴⁴ 例えば役職については Preface (Ⅰ) ix、東禅寺(Tozengee)に住んでいたことやその好印象については第 4 章(Ⅰ) pp.109-110、桜田門外の変については第 17 章(Ⅰ) pp.304-305、西洋人の暗殺は多くの章に見られる。また、東禅寺事件については第 30 章(Ⅱ) pp.146-158 に具体的に書かれており、富士登山と熱海温泉については第 20 章と第 21 章(Ⅰ)、特に第 20 章は富士登山と熱海温泉を論じるための章で、副題に 'A Pilgrimage to Fusiyama, and a Visit to the Spas of Atami' とある。

⁴⁵ お灸については第 21 章(Ⅰ) pp.390-391 にあり、鶯については第 29 章(Ⅱ) p.124 にある。

⁴⁶ 忠臣蔵については第 17 章(Ⅰ) pp.312-314 にある。

⁴⁷ 第 3 章(Ⅰ) pp.87-89。

⁴⁸ 第 34 章(Ⅱ) pp.218-219。

⁴⁹ 第 34 章(Ⅱ) p.213。

⁵⁰ 原題 Mabel Bacon, Alice. *Japanese Girls and Women*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1891; rpt, 1902. *Google Book Search*. Web. 22 Aug.2015.特に第四章 'Wife and Mother' は芥川が注目している妻としての女性という視点で書かれており、その章では 'slave' という言葉が目立ち、奴隷のように虐げられていることが強調されている。

⁵¹ 「発行の辞」日本近代文学館編『復刻 日本の雑誌 36 婦人畫報 第 1 巻 第 1

号』講談社、1982年に、「此雑誌は此時勢に促されて生れたるなり。則ち時勢の要求に應じたるなり。幸に能く女界の活動、教育、好尚、流行等の事實を畫報し得て、更に善美なる傾向を助長し得ば本誌の發行亦た徒爾ならず」とあるように、教育水準の高い女性を主眼に置いている。実際同じ創刊号に掲載されている、大隈重信や日本女子大学校長成瀬仁藏の言葉から、一定の教育を受けている女性が読むことを前提としていると見ることができる。

